

生活教育とは「アクティブ・ラーニング」なのか

—愛知教育大学附属岡崎小学校 6年生の体育の実践から—

守島 叶菜 (愛知教育大学)

1. 問題

本研究では、「アクティブ・ラーニング」の導入が、従来の教育の価値を損ねてしまう可能性を考え、従来の教育の一つである生活教育と「アクティブ・ラーニング」の相違点から、その価値を見出すことを目的とする。

2. 方法

長くにわたって生活教育を標榜している小学校の体育の授業と、文部科学省の「アクティブ・ラーニング」を比較し、相違点から価値を見出すこととした。

- 1) 研究対象:小学6年生1クラス28名
- 2) 期間:平成29年10月18日~12月12日
- 3) 分析方法:川合の生活教育より、生活教育となっていると思われる部分を抽出する。

3. 結果と考察

生活教育とは、川合によると、子どもの生活内容を基盤とし、子どもの興味や関心がある内容を、かかわり合いの中で、主体的に問いや解決方法を見つけることで、生活の充実や、人格形成を目指すものである。授業の実践より、生活教育と思われた特徴を挙げる。

- 1) 子どもが自分の問いをもっている:毎回のコメントシートには、授業で考えたことが好きなように書かれており、多くの問いをもっていた。ゲーム中や作戦タイムだけでなく、放課や給食中にまでチームで話し合いをしていた。教師は子どもがどんな問いをもっているのかを知ることができ、それをもとに授業を作っている姿が見られた。
- 2) かかわり合いの質:クラス全体でのかかわり合いという場面があり、教師はあまり介入せず、自由に話し合う様子を見て、子どもたちがそれぞれの意見の違いや、かかわりがわ

かるように板書をしていた。

3) 自分に取り込んでいる:子どもたちは他の意見を知るだけでなく、実践に生かし、さらに自分の考えに発展させていた。

一方で、「アクティブ・ラーニング」とは、主体的・対話的で深い学びとも言われ、文部科学省の用語集には、ディベートなどを初めとした学修者の能動的な学修であり、汎用的能力の育成を図ると書かれている。

4. 結論

どちらにも主体的・対話的で深い学びという理念は見られたが、中身が違うと考えた。

	生活教育	アクティブ・ラーニング
主体的	問いをもつ	能動性
対話的	内容	方法
深い学び	内面化	階層

生活教育とは、子ども自身が問いをもち、対話の中で得たことを自分に取り組み、生かす教育であるということがわかった。一方で、「アクティブ・ラーニング」では能動的という言葉が多く使われ、対話という形式を取ると読み取れた。また、深い学びというものは、学びの量であったり、質であったりということの、段階的な深さ考えであると考えた。

5. 主な参考文献

- 1) 川合章, 生活教育の理論, P20-21, 株式会社民衆社, 1981
- 2) 文部科学省 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて~生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ~ http://www.mext.go.jp/component/b_menu/singi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf, (参照日 2017年1月30日)